

# 『万葉集』から見る日本の古典

26

獨協大学特任教授 城崎 陽子

## 天武・持統朝 ― その3 ―

先回は天武朝から持統朝への過渡期において謀反の罪を着せられて命を落とした大津皇子の歌を取り上げた。今回は、大津皇子事件の遠因を思わせる恋歌や事件後、伊勢斎宮の任を解かれた大来皇女が弟を思つて読んだ歌を扱う。

我立ち濡れぬ  
山のしづくに  
(巻二・一〇七番歌)

石川郎女が和へ奉る歌一首  
我を待つと  
君が濡れけむ  
あしひきの  
山のしづくに  
ならましものを  
(巻二・一〇八番歌)

大津皇子の死が仕組まれたものであることは先回も記した。生前、大津皇子は日並(草壁)皇子と一人の女性をめぐる恋敵であった様子のうかがえる歌がある。事件の根は案外に深かったのである。

大津皇子、石川女  
郎に贈る御歌一首  
あしひきの  
山のしづくに  
妹待つと

大船の  
津守が占に  
告らむとは  
まさしに知りて  
我が二人寝し

(巻二・一〇九番歌)  
日並皇子尊、石川女郎に贈り賜ふ御歌一首「女郎、字を大名児といふ」

彼方野辺に  
刈る草の  
束の間も  
我忘れめや  
(巻二・一一〇番歌)

「石川女郎」とは、「石川家のお嬢さん」くらいの意味だが、この女性、大津皇子と日並皇子の双方から求婚されていた。そして、この女性の心を射止めたのが大津皇子である。「愛しい人を守つて山の滴に濡れてしまつた」という皇子に対して、石川女郎が「あなたを濡らした山の滴になりたい」と返すのであるから、なんとも羨ましいほどの仲ではないか。

ところが、物事は単純ではなかつた。日並皇子の想いがなかなか石川女郎に届かないからだろう

か、「津守連通」という専門の古い師が占つたところ、日並皇子の恋路を邪魔しているのは大津皇子だと占いに出てしまった。大津皇子は、悪びれる様子もなく、「ええ、二人で寝ましたよ」と答えたというから、日並皇子の葛藤はどれほどだったろうか。日並皇子は石川女郎に「大名児(石川女郎の字)のことはほんの少しの間も忘れませんよ」と歌を贈っているから、未練が残る恋であつたに違いない。こうした大津の言動や評判が持統皇后の目にどのような影を映つていたか、想像するに余りある。夫・天武が亡くなり、息子・日並の即位を目前にして、大津は死を賜るしかなかったのである。



二上山の大津皇子の墓

伯)皇女の歌である。

大来皇女は、天武天皇の嬪宮が続く中、伊勢斎宮を解任されて帰京することになった。これは、近親の死に関わる禁忌を侵さないためであり、父・天武、弟・大津と立て続けに近親者を失つた大来は独り帰京することになるのである。

十一月の丁酉の朔壬子に、伊勢神祠に奉れる皇女大来、還りて京師に至る。  
〔日本書紀〕持統天皇稱制朱鳥元年十一月十六日

この時、大来皇女が詠つた歌が二首ある。

## 折り折りの記 (114)

波多野 重雄

豆を撒くお角力さんに黄色こえ  
節分は江戸時代以降、立春の前日を指す。中国から奈良時代に日本に伝わり、平安時代に宮中行事「追儺」という邪気を祓う季節の節目に行われていた方違え行事と「豆うち」の儀式を合わせたものが「豆撒き」の由来という。

昔から神事は米、次に豆を使う。炒り豆を使うのは撒いた豆から芽が生えないため。高尾山薬王院内や御本尊様の前には鬼はいないから「福は内」のみとしている。当日は初場所優勝玉鷲関や歌手の北島ファミリーの皆様、そして、地元の頭衆や舞姫、歳男・歳女の善男善女多数、袴袴で参列し健康を祈り升(増)を手に豆を撒く市民らは声掛け合ひて声援を送る。  
(高尾山健康登山の会々々長)

## 自然開帳

不眠極寒中

飯縄様の  
分霊祀る仏間にて  
自然開帳初めて起くる  
自然開帳  
(仏様のお姿が現れる超常現象)

独坐御宝前

眠れず、極寒の中…  
独坐す、御宝前にて…

一心唱真言

一心に唱ふ、真言  
(オンキリカクソワカを…)

本尊現眼前

すると、御本尊飯縄大権現様が、なんと眼前に現れるではないか…

「伊勢の国にいればよかつた、どうして帰つてきてしまったのだらう、弟も居ないのに」という一首目も、「会いたいと思う弟もいないのに、どうして帰つてきてしまったのだらう、馬が疲れるだけなのに」という二首目も、弟・大津のいない寂寥感があらわされているといえよう。そして、いよいよ大津皇子の屍を二上山に葬ると

「明日からは二上山を弟と思つて見よう」と詠う一首目の歌も、「馬酔木を手

折るが、見せる弟もいないのに」という二首目の歌も既にこの世にいない弟を慰ふ哀感の籠つた二首である。二首目の左注には「移葬の時の歌」としては時期がそぐわないことが述べられているが、心情的には移葬の際に考えたことなのだとおきたい。

ところで、昭和十八年(一九四三)青磁社より刊行された折口信夫の小説『死者の書』は大和(奈良県)の二上山に葬られた大津皇子の魂が、約七十年を経てよみがえる場面から始まる。そして、その執着の心に絡まれた藤原南家の郎女が、春秋の彼岸中日に二上山頂上に現れる仏の姿(実は大津皇子の姿)に宗教的憧憬を深め、ついに蓮糸で曼陀羅図を織り上げるまでを描いている。大津皇子の死と再生という古代信仰と仏教信仰との習合が一人の女性の悟りをひらく行為によって描かれている。この作品も悲劇皇子への想いが原点にあるように思われる。